

THE NEW ザ・ニュー・ゲート GATE

風波しのぎ
Kazunami Shinogi

24. 真なる契約

Illustration: 晩杯あきら



「THE NEW GATE」世界の用語について

●ステータス

LV:	レベル
HP:	ヒットポイント
MP:	マジックポイント
STR:	力
VIT:	体力
DEX:	器用さ
AGI:	敏捷性
INT:	知力
LUC:	運

●距離・重さ

1セメル=1cm
1メル=1m
1ケメル=1km
1グム=1g
1ケグム=1kg

●通貨

ジュール(J) : 500年後のゲーム世界で広く流通している通貨。
 ジュイル(G) : ゲーム時代の通貨。ジュールの10億倍以上の価値がある。

ジュール銅貨	=	100J
ジュール銀貨	=	ジュール銅貨100枚 = 10,000J
ジュール金貨	=	ジュール銀貨100枚 = 1,000,000J
ジュール白金貨	=	ジュール金貨100枚 = 100,000,000J

●六天のギルドハウス

一式怪工房デミエデン(通称:スタジオ)	—————	『黒の鍛冶師』シン担当
二式強襲艦セルシュトース(通称:シップ)	—————	『白の料理人』クック担当
三式駆動基地ミラルトレア(通称:ベース)	—————	『金の商人』リード担当
四式樹林殿バルミラック(通称:シュライン)	—————	『青の奇術士』カイン担当
五式惑乱園ローメスン(通称:ガーデン)	—————	『赤の錬金術師』ヘカター担当
六式天空城ラシュガム(通称:キャッスル)	—————	『銀の召喚士』カシミア担当



目次 Contents

用語解説	—————	003
登場人物紹介	—————	004
ワールドマップ	—————	006
Chapter1 島からの旅立ち	—————	007
Chapter2 神獣の領域	—————	051
Chapter3 乙女の密約	—————	133
Chapter4 契約の盃	—————	177
ステータス紹介	—————	271

シュバイド・エトラック

521 歳。ハイドラグニル。
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。
竜皇国ギルモントの初代国王。

セティ・ルミエール

515 歳。ハイピクシー。
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。
妖精郷で精霊と暮らしていた。

ミルト

89 歳。ハイピクシー。
ロリ巨乳が特徴の元プレイヤー。
戦闘狂として有名だった。

ユズハ

エレメントテイル。シンに助けられた
モンスター。基本は子狐の姿だが、
人型にも変身可能。

リオン・シュトライル・ バイルリヒト

19 歳。ヒューマン。
バイルリヒト王国第2王女。
王国最強の剣士で
大剣を自在に操る。

ティエラ・ルーセント

157 歳。エルフ。
強力な呪いの名残で髪の大部分が黒い。
故郷を追放され、シュニーに保護された。

シュニー・ライザー

521 歳。ハイエルフ。
ゲーム時代のシンのサポート
キャラ。
500 年間シンを待ち続けた。

シン

本編の主人公。
21 歳。ハイヒューマン。
オンラインゲームで
名を馳せた最強プレイヤー。
デスゲームクリア後、500 年
後のゲーム世界に飛ばされる。

Chapter 1

島からの旅立ち

THE NEW
GATE

エルトニア大陸

THE NEW GATE

海

グランモスト山脈

クリカラ

パツナー

ジグルス

No.43の聖地

エルクント

ローメヌン

アルガラツ

竜皇国
キルモント

バルバトス

ファルニッド
獣連合

ラナバシア

聖地カルキア

レンツ

ラルア大森林

ベイルーン

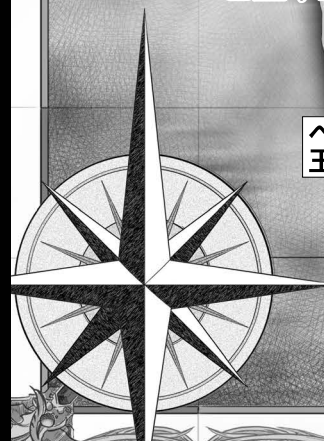
バルメル

ヒノモト

亡霊平原

ベイルリヒト
王国

クウエイン海域



技術者集団『黒の派閥』の本拠地、バルダ島。そこで強大なモンスター、ヌヴァとの戦いを終えたシンたちは、防衛にあたっていた戦闘部隊の隊長バルザンたちに迎えられ、戦いの傷が残るバルダ島の復興に協力することになった。

島民とともに建物や人的被害の確認をし、ヌヴァが消えたことによるモンスターの分布の変化の調査などを行っていたシンたち。

そんな中、鍛冶師として竜殺しの武器を作るために尽力していた、ドラグニルの少女レトネーカが気落ちしているのを見かける。悩みを聞いているうちに身の上話まで聞くことになり、その過程で彼女が自分の父親を殺したドラゴンについて記憶操作を受けていたことが判明。

シンが行った処置によって事なきを得たあと、このままふさぎ込むのもどうかとちよつとした気分転換を提案し、シンは数人のパーティメンバーとともに海に出ることにする。

釣りやちよつとしたウォータースポーツもどきを楽しむ一行だったが、突如出現した特殊なダンジョンに引き込まれてしまう。

そして、ダンジョンマスターであり、神獣でもあるフルベガスとの対面を果たすと、迷宮への挑戦が決定。特殊なギャンブル要素のあるダンジョンに苦戦しながらも踏破を進める中、シンは道中でレトネーカに鍛冶の技術について語り、その目に新たな光が宿るのを見届けつつ、ボスのもとへ

とたどり着く。

しかし、特別なギミックにより弱体化していたシンたちは、真の姿で顕現したフルベガスの一撃の前に光の粒子となって消えるのだった。

+

自身に向けて放たれるフルベガスの強力無比の一撃。

ダンジョン挑戦の待機場所に戻され、目覚めたシンが思い出したのは、その力強さと己の無力さだった。

「……負けたか」

地面に寝転んだまま、ボツリとこぼす。その事実を受け入れるのに、少しだけ時間がかかった。

シンは自分の強さがステータスに支えられていることを痛感し、小さくため息が漏れる。

なまじこれまで明確に負けたと言えるような戦いがなかっただけに、ショックがないとは言えない。

「よっとー」

気持ちを切り替えるために、大げさなくらい勢いよく起き上がる。落ち込んでいても仕方がない。ルールに則った上で負けたのだ。その事実是否定できない。

だが、それはそれとして全力ならどこまでやれたかとも考えてしまう。従魔のユズハのことが気がかりだっただけに、簡単に気持ちを切り替えられないのもまた、事実だった。

フルメンバーを揃えて挑みたいという欲求もあったが、それよりも今はユズハのことだ。フルベガスとの勝負に負けた以上、勝利報酬だったユズハに関する情報は得られない。フルベガスは、情報自体は別の場所でも得られるというような言い方をしていた。だが、それがどこかは不明だ。

それならば、他に情報を知っている奴を教えろと言いたくなるというもの。まだ戦っているのか戻ってこないシュニーとユズハを待ちながら、シンはこのあとどうするか考えた。

ゲーム【THE NEW GATE】だった頃のことを踏まえると、フルベガスと再戦できるかは五分五分といったところ。ただ、再戦できても勝つのは難しいと言わざるを得ない。ゲーム時代も勝てるかは運ゲーだと言われていたのだ。デバフルレットの存在がある限り、確実に勝つのはほぼ不可能。加えて言うなら、戦うためのメンバーも足りない。黒の派閥の島に残ったハイドラグニルのシュバイドたちも必要だ。

「あの、シン……」

「ん？　どうかしたか？」

考えに耽^{ふけ}っていたシンに、ティエラが遠慮がちに話しかけてくる。申し訳なきが伝わる表情に、シンはティエラの感情が良くない方向へ揺れているのを察した。ゲーム時代に、似たような経験をしたことがあるのだ。

なので、このあと出てくるだろう言葉も予想できる。

「ええと、その、役に立てなくて、ごめんなさい」

「いやいや、あれはもう負けイベ——あー、勝てなくて当然の戦いだったから、役に立たなかったとかそういうのは気にしないでいいんだよ」

ほぼ予想通りの発言に、シンは体の力を抜いてなんでもないという風に返す。

今回は状況も悪ければ相手も悪い。実際のところ、シン自身ステータス半減のデバフを受けた段階で諦めが頭をよぎったくらいだ。ティエラが最適な行動をしていたとしても、勝利という結果は得られなかったのは間違いない。

「そもそも、完全体のフルベガスとか反則みたいなもんだからな。こう言っちゃなんだが、通常個体ならともかく、完全体はあのルーレットなしでも勝てるかわからないんだよ。あれはなんというか、神獣の中でもさらに特別なモンスターなんだ」

「普通じゃないのは、初めから感じていたわ。専用のダンジョンを持ってるし、人に変身するし、最後のあれはちょっと言葉で言い表せなかったし」

人型形態^{うみぎ}も兎のようなモンスター形態も、見た目に関しては高評価のフルベガス。しかし、ボスとしての評価になると、そのギミック設定から賛否が分かれる。

ティエラの感想はゲーム時代にはなかったものだが、人型になるモンスター自体知られていない五百年後の今の時代では、運頼りのダンジョンより、そちらが珍しく思えるのだろう。

「ま、今回は文字通り運が悪かったってことだ。どうしようもないさ」

「でも、ユズハちゃんのこと、このままってわけにはいかないでしょ？」

「それは、そうなんだけどな」

ティエラの言う通り、どうしようもないとわかっているが、納得できるかは別問題。フルベガスに勝ちたいのではなく、その結果として手に入る報酬が肝心なのだ。悔しい気持ちはあるが、情報が手に入るなら勝ち負けはこの際どうでもいいと思える。

「ぐるるう」

気落ちしているティエラとは対照的に、子狼モードで抱えられている相棒のカゲロウは不機嫌そうに鳴いた。フルベガスとは持っている力は違えども、カゲロウもまた同じ神獣という枠組みの中にいる。だからこそ、一方的に倒されたのが悔しいだろう。その目には、もっと強くなりたいという意思が宿っているように見えた。

「カゲロウはまだまだやる気みたいだな」

「カゲロウ……」

闘志を失っていないカゲロウを見て、ティエラは表情を引き締めた。相棒がくじけていないのだ。自分が不甲斐ない姿を見せてはられないと思っ直したのだろう。

（カゲロウもステータスを考えれば負けることってあまりなかっただろうし、自信をなくす可能性もあったわけだが、そうじゃなさそうで良かった）

「さて、このあとは……」

「ううん……」

今後のことについてシンがどうするか考えていると、ミルトが目を覚ました。倒されたタイミングはほとんど同じだったはずだが、目覚めるまでは個人差があるようだ。

「あー……やっぱりだめだったかあ」

周囲を見回して状況を把握したミルトは、起こしていた体を再び床に横たえた。服のことが意識から抜けているのだろう、どさっと音のしそうな勢いで倒れた反動で、バニー服に包まれた胸が大きく揺れる。

シンは普通のバニー服なら脱げていたのでは？ と心配になるが、そこは装備としての仕様ゆえか、しっかりと張り付いた衣装は一切ずれることはなかった。

魅力的ではあるし、目の保養にもなるが、激しく動く時に着るものじゃないかと改めてシンは思う。

「シンさん、これからどうするの？」

視線を向けられていることに気づいていたようで、ダンジョンの天井を見ながらミルトが問うてくる。

「ティエラとも話してたが、現状じゃ勝ち目がない。他のメンバーを連れて再挑戦するか、どうか情報をもらえるよう交渉するか、だな」

フルベガスはこの世界を移動するのに制限が課せられている。そこを上手くついで交換条件にできないかとシンは考えていた。彼女の移動の制限を緩和させられれば、フルベガスは対価として情報をくれるということもあるのではないかと思うのだ。

「交渉、応じてくれるかな？」

「フルベガス自身は情報を渡したがっていたし、勝つまでやるよりは希望があると思うんだよ。再挑戦だって、できるかわからんし」

「完全体に勝てたって情報、あったっけ？」

「聞いたことないんだよなあ」

ここがゲーム仕様の一般的なダンジョンであれば、勝てる可能性は十分あった。

ゲームならば、たとえ最強格のモンスター相手でも、何度も戦って行動パターンや能力を調べ、対策をして、少しばかりの運を味方にできればいつかは勝てる。

ユズハの正体であり、九尾の狐がモデルと言われるエレメントテイル。

ギルドハウスの一つで空を飛ぶ城であるラシユガムを根城ねじろにしている銀色のドラゴン、ツアオバト。

それらのモンスターも、幾度となく挑み、情報を集め、対策をした結果、倒されている。

ただ、フルベガスにはその報告がない。ゲームの攻略情報や最新情報を集め、公開している情報サイトでも、フルベガスだけは完全体の討伐報告がなく、ドロップアイテムも一切不明だ。

最大の難所であるデバフルーレットで心を折られた者は数知れず、スーパーレアアイテムと名高い素材アイテムのアルマタイトの収集と同じ、エンドコンテンツ扱いだった。

フルベガスのダンジョンは、現実となったこの世界でなおゲームの仕様が生きているが、仕様を理解していても勝てるとは言い切れない。それが完全体フルベガスという存在なのだ。

「また、戦うんですか？」

「ん？ ああ、やれるならやってみようかとは思ってる。次も完全体が出るとは限らないからな」

ミルトと同じく目を覚ましていたレトネーカの問いに、シンは真剣な表情で答える。質問をしてきたレトネーカの瞳には、怯えおそが見えた。

「あれは、人が勝てるものなんでしょうか……」

モンスターにおける最高峰に位置する完全体フルベガスを見て、レトネーカは戦意を喪失きずしつしてしまったようだった。シンが教えた鍛冶の技に興奮していた時の目の輝きはどこにもない。戦闘と鍛冶は別物なので、当然と言えば当然だが。

「フルベガス戦は色々と特殊な条件があるからな。相手が完全体じゃなきゃ、勝った奴もいるんだよ。デバフルーレットをくぐり抜けた後の、出現率ガチャに勝たなきゃいけないのがなあ」

「ええと……？」

自分の疑問とシンの答えがずれていることに、レトネーカは反応に困っていた。

「あー、つまりな。ほとんど万全って状態でボスまでたどり着いても、完全体が出てこなきゃ意味

がないんだ。ルーレットが上手くいった時に限って、完全体が出なかったりするんだよ」

「いえ、私が言いたいのはそういうことじゃ」

ゲームだった頃のことを思い出しながら、シンは話す。戦いの場を離れてもフルベガスの威容が忘れられないレトネーカは、そんなシンの様子に困惑しっぱなしだ。

「レトネーカの言いたいことはわかってる。でもな、あえて言うぞ？ 大丈夫だ。人と装備が揃えば、絶対に勝てる。それに、完全体じゃない方なら俺も倒したことがあるしな」

ゲームの時のようにいかなることくらい、シンも理解している。それでも、シンは不敵な様子で笑って見せた。

神獣を間近で見ても、萎縮してしまふのは無理もない。だが、それを引きずってはいは、レトネーカの今後の人生にまで影を落とす。

そうさせないために、シンは深刻な雰囲気を出さないように動いた。

「そうそう。万全な状態のシンさんなら余裕余裕。今回は戦うためのメンバー構成でもなかったし、気にしちゃだめだよ。むしろ、あの毛を剃って丸裸にしてやるってくらいの気概じゃなきゃね」

シンがあえて明るく振る舞っているのを察したミルトも、軽口を交えてレトネーカを励ます。フルベガスが毛を剃られた姿を想像したのか、レトネーカは小さく噴き出した。大きさを雰囲気はともかく、見た目は白兔だ。想像しやすかったのだろう。

「ふっふっふ、その想像を現実になようぜ」

「それは、ふふ、楽しそうですね」

ニヤツと笑ってみせたミルトに、レトネーカもぎこちなくはあったが笑って返した。

その後、モンスターとしてのフルベガスがどういふものなのか質問してきたレトネーカに、シンがゲーム時代の知識を交えて話す。ゲームの時の感覚とダンジョンの様子からして、大きく違うこととはないだろうとシンは思っていた。

「それにしても、師匠、戻ってこないわね」

話をし始めてからしばらくして、ティエラが呟く。

「確かにな。俺達がやられた後に戦ってるにしては、ちょっと時間がかかりすぎている気がする。いくらシュニーでも、あれとタイマンはきついはずだけど」

何かあったのかと心配になったシンだったが、まるでその心配を察したかのように仄かな光とともにシュニーの姿が現れる。横になっているシュニーの前には、大人の女性の姿になったユズハが立っていた。

「ユズハ？」

自分の知るゲーム時代の姿そのままのユズハにシンが声をかけるが、その声が聞こえていないかのように反応がない。

シンが近づくと、ユズハはやっと気づいたのか、力なく垂れていた頭上の耳がピクリと動いた。

「シン……」

「何があったんだ？」

これで何もないなんてことはないだろうと、シンはなるべく穏やかな口調で話しかけた。

ユズハの頭上で揺れていた狐耳が、またへによりと力をなくす。

「私は、あなたに言わなければならぬことがある。あとで、時間をもらえる？」

「わかった。あー、きついなら無理はするなよ？」

シンの言葉に、ユズハは小さくうなずいてから子狐の状態に戻る。シンが抱き上げると、どこか所在なさげなユズハは、その腕に軽く頭を擦り付けてから目を閉じた。その様子に、消耗^{しょうもう}していたのだらうかとシンは思う。しかし、ステータスには異常はない。

パーティーメンバー全員が意識を失った状態で転移されている状況で、唯一意識を失わずに転移してきたユズハ。シンは自分たちとは仕様が違うのかと疑問を抱きつつも、聞ける雰囲気ではないなと後でまとめて聞くことにして、追及はやめておいた。

「ユズハから、話は聞きましたか？」

ユズハを抱き上げたタイミングで、目を覚ましていたシュニーが身を起こしながら聞いてくる。

「いや、後で時間がほしいとは言ったな」

そこまで言って、シンはここじゃ話じぶらいことだったんだろうと思った。考えられるのは、レトネーカの存在だ。今更ミルトやティエラを避ける理由はないはずなので、今回巻き込まれる形になったレトネーカに聞かせられない話なのだろうと予想する。

「向こうで話し合いをした甲斐はあったようですね」

「やっぱり、時間がかかっていたのは戦ってたからじゃなかったのか」

「はい。ユズハの件はそのままにしておいてはいけない、そんな予感がしました。私はシンほど優しくはありませんので」

「俺は優しいんじゃないって踏み込む勇気がないだけだよ。今回は、シュニーの方が正しかったみたいだし」

気になることがあっても、相手が話してくれるまで待つ。それも悪い選択というわけではない。

しかし時間をかけた結果、事態が悪い方向へ向かうこともある。

「偶然ですよ。フルベガスが色々とちよっかいを出してきたので、女の勘が働いたんです」

「さすが、頼りになるな」

「ふふ、では後で褒めてもらいましょうか」

ユズハの話はレトネーカには話せないと確信したので、シンは最後に重苦しくならないように軽い雰囲気意識して話す。空気を変えようとしていることに気づいたシュニーも、調子を合わせてくれる。

レトネーカに注目されていることにシンは会話の途中で気づいていた。近づいてくる様子はなかったのですが、どこまで話が聞こえていたかはわからない。もし不審がられていたとしたら、レトネーカはユズハの姿に驚いていたようでもあったので、そちらに話を逸らせばいいかなともシンは

考えていた。

一旦シュニーとの話をやめ、少し距離の離れていたメンバーと合流する。

『内緒話は終わり?』

『そこまで内緒ってわけじゃないが……というか、レトネーカがなんか固まってないか?』

からかうように音声チャット——【心話】で話しかけてきたミルトにシンが応じていると、レトネーカがこちらに全く反応していないことに気づいた。心ここにあらず、といった表情だ。

「レトネーカ? おい、大丈夫か?」

「あ、えっと、はい。大丈夫です。ちよっと、驚いちゃって」

「驚く? 何かあったか?」

驚くようなことが思い当たらなかったシンは、はて、と首を傾げる。

「その、ユズハ、さんも、人の姿になれるんだって」

「ああ! そういえば、基本は子狐状態だから、大人の姿になったのを見るのは初めてか。まあ、なかなかできることじゃないからな」

シンにとっては当たり前のことだったので、すぐには思い当たらなかった。尊敬や畏怖の念からか、ユズハに対する呼び方も、ちゃん付けから、さん付けに変わっている。

「この前の戦いのこともあって、ユズハさんもすごい力を持つてるのはわかっていたつもりだったんです。けど、さっきの人の姿を取っている時の感じがフルベガスさんと戦った時の感覚に似てい

て。もしかして、ユズハさんは眷属けんぞくじゃなくて、あの時のモンスターそのものなんじゃないかって思ってた」

黒の派閥では、ヌヴァを消し去った時に現れた巨大な狐型モンスターはユズハとは別の存在だと思われている。シンもユズハをただの眷属の一匹と思わせるように話したし、ユズハが黒の派閥の構成員の前で本気を出すこともなかったので、特に疑われてもいない。

しかし、フルベガスという本物の神獣の力を目の当たりにしたレトネーカは、ユズハが人型になっていた時に放っていた気配や力に同じものを感じたようだ。

まだ困惑しているようで、考えをまとめながら話している様子だが、本人はユズハの実力を疑っていないのだろうなとシンは思った。

「ちよっとこっちも色々あってさ。すまないが、あまり詳しくは話せないんだ。でも、レトネーカやパルダ島の人たちに迷惑がかかるようなことはしないから、安心してほしい」

「はい。それは私も疑ってはいません。なんというか、とんでもない存在に立て続けに遭遇して、ちよっと自分の中の常識が吹き飛んじゃいそうなんです」

「それはまあ、そうだな。それにヌヴァといいフルベガスといい、強いだけのモンスターとはちよっと違う奴らが続いているし」

フルベガスやユズハの強さの理由は大きさだけでなく、底知れぬ特殊な能力を持つことにある。単純な大きさとパワーを考えるなら、ヌヴァは目に見える通りの強さという意味でまだ一番普通に

思える。ただ、それでも「普通」という言葉の意味がわからなくなるくらいのおかしさである。

そもそも人型になるモンスター自体が少ないので、立て続けに遭遇しているレトネーカはとんでもなく貴重な体験をしていた。

「そういえば、フルベガスは結局どうなったの？　なんか戦ってたわけじゃなさそうだし」

ミルトの問いに、シュニーは首を左右に振りながら答えた。

「あちらもやる気はないみたいでしたので、リタイアという形で終わらせました。現状では勝ち目がありませんでしたから」

フルベガスのダンジョンは、デバフルーレットの存在から、どう見ても攻略は不可能と思えるような事態が発生することが多い。なので、パーティーメンバー全員が合意すれば、リタイアすることができる。

デメリットもないので、シュニーはそれを使って戻ってきたようだ。

フルベガス本人はどうしたのかとシンが思っていると、視線の先で光が集まりだし、人の姿を形作った。

「お待ちせしやったかしら？」

そこに現れたのは人型のフルベガスだった。

「いや、そうでもない。というか、結局クリアせずに報酬をもらったような形になってないか？」

ユズハの言わなければならないことがフルベガスの伝えたかったことなのではないか、とシンは

思ったので直接聞いてみた。フルベガスの様子から、答えはイエスだとわかる。

「いいのいいの。もともとそれが一番の目的だったんだから。それに、他にも色々と興味深かったし」

そこまで言って、フルベガスはじつとシンを見つめてくる。

「なんだ？　あまりいい予感がしないんだが」

「ちょっと考えてみたんだけど……この際、私も契約してみない？　その子とできるくらいだし、いけると思うのよね」

冗談なのか本気なのかわからない表情で、フルベガスが提案してくる。まさかの提案に、シンだけでなくシュニーたちも驚いていた。

シンの腕の中にいるユズハも目を閉じていたが意識はあったようで、剣呑な^{けんおん}気配を発し始めている。そのおかげで、予想外の提案に呆けていたシンの意識が瞬時に戻った。

「いやいやいや、ユズハのことも解決してないのに契約なんて考えられるわけないだろ！　それに、できたとしても、そっちの迷惑通里とはいかないんじゃないか？」

フルベガスの目的が、この世界を自由に移動できないことからの解放だろうということには、シンもすぐに思い至っていた。ユズハの情報を得るために、交換条件としてフルベガスに自由を与える契約を持ち出すことは、真っ先に思いつく手段である。

ただし、それほど簡単な話ではないとも思う。フルベガスのそれは、世界そのものが彼女に課し

た制約だ。強大な力も、地脈と深く繋がっているからだと言われている。

そんな彼女がシンと契約することで地脈から離れたら、彼女自身にどんな影響があるかわからない。

「そうかしら。あなたは色々と規格外みたいじゃない。すでに神獣と契約できるだけのポテンシャルは証明されているんだし、私の枷もどうにかできる気がするのよね」

その口ぶりから、予想は当たっていたようだと思はれる。フルベガス自身も、その身の制約に納得しているわけではないらしい。

「ダンジョンはどうするんだ。移動ができるようになったら、こういう特別なダンジョンもなくなるかもしれないぞ」

「どちらかと言えば、ここだって私の力を制限する枷みたいなものだもの。ダンジョンを好きにできたって、挑む人がいないんじゃないか。昔ならともかく、今じゃ誰一人寄り付かないし。こうしてお喋りできるってだけで、あなたが思う以上に楽しい嬉しいのよ」

シンたちにとっては何気ないことでも、フルベガスにとっては貴重な体験なのだろう。セリフの最後のところだけ、浮かべていた笑みが少し曇っていた。

「そっちの境遇は知っているから思うところがないわけじゃないが、さすがに無理だな。今はユズハのことが最優先だ」

仮にできたとしても、シンにフルベガスと契約する気はない。単純に何が起こるかわからないと

いうのもあるし、ユズハのことだって解決していないのに厄介事を背負う気もなかった。

「少しは考えてくれないじゃないか」

「無茶言うな」

唇を尖らせる彼女は、冗談を口にしてるようにしか見えない。しかし、いくらかは本音なのだろうなとシンは思った。

こちらに来てから話をしてみて、フルベガスの性格はゲーム時代とさほど変わっていないと感じた。神獣クラスのモンスターは人に対して友好的なもの、中立なもの、敵対的なものと分かれるが、フルベガスは友好寄りだ。ゲームでは会話を楽しんでいるような描写もあった。そこから考えれば、誰ともコミュニケーションの取れない今の状況は辛いのもかもしれない。

「まあ、ユズハのことを教えてもらったわけだし、何かできないか考えてはみるさ。何かできるかはわからないけどな」

「あら、言ってみるものね。ふふ、やっぱり神獣と契約する人は違うわね」

断られることは想定済みだったのだろう。しかし、その後の言葉は予想外だったのか、フルベガスの拗ねた表情が一転して満面の笑みになった。

「事情を知っていれば、少しは何かできないか考えるくらいはするだろう」

「それはあなただからよ。普通はあの子みたいに圧倒されて話をするのも難しいわ。神獣の頼みごととは、大抵の人からしたら圧倒的な武力を背景にした脅しと同じ。機嫌を損ねたらどうなるかわか

らないっていう恐怖ばかりで、話し合いにならないのよ」

まるで経験してきたように語るフルベガスに、もしかすると自分が来る前にも同じようなことを持ちかけた相手がいたのかもしれないとシンは思った。確かに、一般人はレトネーカのような反応になってしまふのだろう。

「俺の場合は、昔のフルベガスを知ってるっていうのもあるのかもしれないな。ただ、先に言っておくがあまり期待はするなよ。考えるとは言ったけど、神獣の縛りを解くなんて何をどうしたらいいのか見当もつかないんだからな」

期待はするなとシンは釘を刺す。わからないのは本当なのだ。

「それでも、期待しているわ。たぶん、今回以上に希望が持てることは、ないでしょうしね」
そう言いながら、フルベガスはシンに近づいてくる。

「何をする気だ？」

唐突な行動にシンは少し警戒して声をかけた。イベントで出てくるモンスターの中には、一方的に契約を押し付けてくるものもある。

今更フルベガスがそれをするとは思えないが、強者ゆえの気まぐれもありえないとは言えなかった。

「私とダンジョンはいつまでもここに居るわけじゃないのよ。だから、私の居場所がわかるように、あなたに加護をあげようと思うの」

「加護？ そんな能力あったか？」

モンスターの中にはプレイヤーに加護という名のバフを与えてくれる存在もある。エレメントテイルはその筆頭のような存在だったが、フルベガスが加護を与えてくれたという話をシンは聞いたことがなかった。

「一応確認するが、変な加護じゃないだろうな？」

「変な加護って何よ。神獣の加護は貴重なのよ？」

「加護の中には特定の種族に強くなる代わりに敵意を向けられやすくなるような、デバフっぽい効果のあるやつもあるだろ。強力なモンスターの加護は、効果はでかいが、たまにきついデバフもセットだったりするからな」

基本的に加護はちよつとしたバフ効果をほぼ永続的に与えてくれる有益なものだ。ただシンが言うように、デバフがセットだからバフの効果も高いというパターンもある。プレイヤーの中にはあえて加護をもらわないようにする者もいたくらいだ。

「私の加護はそういう効果はないわ。まあ？ 神獣の匂いというか、気配みたいなものは少しだけつくかも知れど」

「普通にやばいだろ、それ。神獣の気配をまとった奴とか怪しいにもほどがあるぞ」

能力の高い者ほどそういった気配に敏感だ。毎度強者に素性を疑われることになれば、面倒が増える。フルベガス自身も程度がわかっていないのであれば、受ける側としては不安があった。

「だったら、本当に小さな加護にしておくわ。あなた自身の気配に紛れる程度に抑えると、ステータスのLUCが少しだけ上がるくらいの効果しかないけど」

「十分なんだが？」

LUCはプレイヤーの間でも謎のステータスと言われている。STRやVITのような戦闘に直接関係するステータスは自身の分身であるアバターを作成する際に、一定の値をプレイヤーが好きに振り分けることができる。

しかし、LUCはランダムで決まる。ひたすらリセットを繰り返して最高値を出すこともできると聞いたことがあったが、半日続けて出なかったのでシンは諦めた。

ただ、この値が高ければ高いほどレアドロップがしやすいとか、レアモンスターとエンカウントしやすいといったことはないようなのだ。

これがなんの値なのか質問を送っても運営はだんまりを決め込んでいたため、プレイヤーたちも次第に気にしなくなっていった。確率に関係する数値ではないかと検証した者もいたらしいが、あくまで噂程度であり、シンも攻略サイトや掲示板でそれをまとめたデータを見たことはない。

「欲がないわね。人はもらえるものは全部もらおうとするものだと思ったけど」

「昔ならそうだったろうけどな。今は状況が状況だから」

この先、また神獣を相手にすることもあるだろう。上位の神獣ともなれば今のシンでも太刀打ちできるかわからない。それでも、今回ばかりはリスクを取ることはできなかった。

「まあいいわ。じゃあ加護をあげるから、じっとしててね」

そう言うと、フルベガスは両手でシンの肩を掴む。そのまま顔を近づけてきたので咄嗟にシンが顔を背けると、フルベガスは顔に迫ってくることはなく、そのまま首筋に口づけた。

「ふふ、唇を奪われると思ったかしら？」

「驚かすなよ。危うく拳が出るところだったぞ」

からかっているのがわかるフルベガスに、シンはジト目を向けながら言う。もしフルベガスが本当に唇を狙っていたとしたら、相手を吹き飛ばす効果のあるスキルを放っていたに違いない。実のところ、発動一歩手前まで準備はできていたりする。

「私のために動いてくれるんだし、ちょっとくらいサービスしても良かったんだけどね。それはあつちに怒られちゃうから」

シンが視線をフルベガスの背後に向ければ、シュニーを筆頭に女性陣からの視線が飛んでくる。

困惑気味のレトネーカ以外は、皆一様に視線が冷たい。

「見逃してもらえ一線はこのくらいでしょ」

「一線は踏み越えてないだろうが、後で俺の対応を責められるやつでは？」

「人間は美人に責められるのも、ご褒美になるって聞いたことがあるわよ？」

「それはごく一部の奴だけだ……」

なぜその少数意見を参考にしたのかと呆れるしかない。

「で、これで本当に居場所がわかるのか？ 何も感じられないけどな」

ステータスを確認すると、称号欄に新しく『ぼくと博鬼の加護かこ』が追加されている。LUCの数値も10上昇していた。しかし、他に何が変わったという感覚はない。

「仕方ないわ。必要な時だけ働け加護だから。これだけ近くにいてはつきりわかるとなると、ほとんど契約と同じ強い加護になっちゃうもの。そこまでは望んでないでしょ？」

「そうだな」

「距離が離れたらなんとなく方向と距離がわかる、くらいだと思わ。少なくとも、常に私のいる方向が気になる、なんてことはないはずだから」

「それなら大丈夫か」

感覚が変わるのはいろいろと困るので、そのくらいでちょうどいい。シンは試しにと意識を集中してみる。フルベガスの存在が強く感じられる、などということはなく、本当に彼女の言った通りなのだろう。

「問題はなさそうだな。さて、じゃあさっさと島に戻るか。連絡してあるとはいえ、ドルクたちも心配しているだろうし」

シンたちの能力の高さやダンジョンの仕様を知っているシュバイドたちは、さほど心配していないだろう。だが、レトネーカに関してはそうもいかない。この世界の住人にとって神獣やその領域は命を懸けても踏破することなど不可能な存在。ここが安全だとわかっていても、レトネーカを心

配する人と思うと早く戻るに越したことはない。

「もう少しゆっくりしていけばいいのに」

「そうもいかない。ユズハのこともあるからな。加護のおかげで居場所がわかるようになったし、会おうと思えば会えるだろ」

「いつでも会えるわけじゃないでしょ」

名残惜しそうにするフルベガス。次に人がやってくるのがいつになるかわからないことを考えれば、シンにもその気持ちが理解できる気がする。しかし、ユズハの件が最優先である今は、ここで長居をするわけにはいかないのだ。

「たまに会いに来るって」

「絶対よ？」

神獣でも、人恋しいんだなと思いつつ、シンたちはフルベガスの領域を後にする。領域を出る時は、乗ってきた船に乗り込むと自動で海に戻してくれた。パルダ島に近い場所まで移動していたのは、フルベガスなりのサービスだろう。

「さて、島に帰るとするか」

船を操作してパルダ島に進路をとる。そんなシンの背後から二本の手が伸び、両肩に乗せられた。

「島に着いて事情を説明した後に、少々お話があります」

「僕もちょっと言いたいことがあるかな」



明るく、陰を感じさせない声音。しかし、シンの後頭部に突き刺さる視線はひどく冷たい。
今振り向けば、笑みを浮かべながら怒るシュニーとミルトの姿があるのだろうとシンは確信していた。フルベガスに挑むより、二人の相手をする方がよっぽど怖い。

船がバルダ島に着くまでの間、シンは冷や汗を流しながら二人の対応をすることになった。

+

「うおおおおお！ レトネーカアアアアア！」
「ん？」

バルダ島の港に船を停泊させ、島に降りると、大声を上げながら走ってくるドルクの姿があった。黒の派閥の武器部門の長とは思えない慌てっぷり。近くまで来るとブーツで地面を削りながら急減速し、レトネーカの前でピタッと止まってみせる。

困惑するレトネーカをよそに、ドルクは頭の中から足元まで視線を巡らせていた。

「ええと、連絡していた通り、怪我とかはないよ」

「知っとるわ。しかしだな、わかっていてもこの目で見るとは安心できんのだ」

そう口にするドルクの目は、レトネーカが倒れたと聞いて慌てて走ってきた時と同じ、親の目をしていた。

シンは氣遣うように声をかける。

「とりあえず、何があったか説明します。一旦、どこか落ち着けるところに行きませんか」

「む、そうだな。連絡をもらっていたから、近くの施設に空き部屋を確保してある。すまんが他の部門長も話を聞きたいと集まってきていてな。情報共有してもらえると助かるんだが」

意思疎通できる神獣の領域という、この世界でも最高レベルの未知の情報だ。部門が違おうが構わずすつ飛んできたドルクは続けた。

「そりゃ気になりますよね。わかりました。あ、でもレトネーカは休ませてあげてください。俺たちは多少慣れていますが、レトネーカはそうもいかないでしょうから」

戻ってくる間に、レトネーカにはダンジョンであったことの一部は黙っていてほしいと頼んである。島を守ってくれた恩人に不義理はしないと、レトネーカも了承してくれていた。

「さて、では早速話を始めさせてもらう。道中も軽く聞いたことだが、シン殿の話では今回見つかった神獣の領域はずつとそこに留まっているわけではないとのこと。周囲に影響はないのだろうか？」

ドルクが確保していた部屋にはすでに各部門長が揃っていた。そしてすぐに情報共有が始まる。

レトネーカは同席するが、端で休んでもらう。

最初に口を開いたのはドルクだ。先にいくつか聞きたいことを伝えられており、情報を整理して

おいてほしいと頼まれていた。

「少なくとも、あの場所から移動するまでは大丈夫です。なにせ、ダンジョンの主が明言していましたから」

船に戻る前に、シンはフルベガスに思いついたことを聞いていた。意図せずダンジョンに人々が迷い込むことはないかという質問だ。

シンは加護によって彼女のいる方向がわかると言っても、正確な距離まではわからない。出現したダンジョンにシンたちが着くまでの間に、もしくは近づこうとしない時にダンジョンが出現したことで、把握していない間に周囲への被害が出て困ると考えた。

ただ、そこはフルベガスの意思で設定を変えられるようで、普段はゲーム時と同じく大人しくしていると言質^{げんち}をもらっている。

「意思疎通ができる神獣か。それだけでもとんでもないというのに、ダンジョンを所有しているとシン殿の話でなければ、信じられなかったかもしれないな」

神妙な顔で未解明技術部門の長であるヴァンクが言う。

神獣自体は存在が確認されている個体がいる。しかし「領域」という自らの領地とも呼べるものを持った個体はほとんど把握されていない。なぜなら、その多くが領域に足を踏み入れたが最後、帰ってこられないからだ。

命からがら逃げ延びたわずかな人々の報告によって、そういったものがあることは把握されてい

る。ただし、中にどんな存在がいるかはわかっていないことがほとんどだ。移動中にシンはシュニーからそう聞いていた。

「ある程度強くないと近寄れないようにしているらしいので、間違って迷い込むこともないはずで。それに、入れるのは相応の強さを備えた者ですから、妙なことはしないでしょ。ある程度の実力があれば、フルベガスの恐ろしさは理解できる。彼^{ひが}の能力差もわからない奴にどうにかできる相手じゃありません」

「安全、というのも変な話だが、少なくとも周囲への影響はなさそうだね」

話を聞いて、生産部門の長であるユラが小さく息を吐く。

「はい。その点は安心していいと思います」

ヌヴァとの戦いの後始末もまだ終わっていないのだ。鳥の人がこれ以上厄介事が続いてほしくないと思っているのは、シンも容易に想像がついた。

「では、次の質問だが――」

各部門長から飛んでくる質問に、シンはできる限り答えていく。懸念や危機感だけでなく、未知への興味もあり、話は脱線を繰り返し、結局話し合ひは日が暮れるまで続いた。

休むように言われていたレトネーカも、その場にいたということで話し合いに参加していたが、戦闘の疲れもあり、やがて船を漕ぎ始めてしまう。そのため、その日は一旦解散となった。

「さて、じゃあ、話を聞かせてもらおうか」

食事を終えた後、シンとパーティメンバーたちはギルドホームの一つ、二式強襲艦セルシュトースの一室に転移していた。ないとは思いますが、ユズハの話を他の誰かに聞かれないようにするため。子狐のユズハを囲むように椅子に座り、話し始めるのを待っている。

シュニーはすでに話を聞いているようだが、代わりに話す気はないようで椅子に座ったまま無言でユズハを見ていた。

少しの間沈黙していたユズハが人型になる。以前見た、大人と少女の中間くらいの姿だ。

「力が戻ったのに、姿はそっちなのか？」

「力自体は馴染んだけど、中はまだなの。体は良くても精神はもう少し時間がかかるわ。情報量が違うから、一番楽なのはこの状態。戦闘になれば、体もそっちに最適化するからまた少し変わるけど。今の状況を説明するのに支障はないから、このままでいいかしら？」

「そういうことなら構わない」

シンがうなずくのを見て、ユズハは小さく息を吐いて話し始める。

「伝えなければならないのは、今の私の状態のこと。シンが向こうの世界に行く時、私も一緒に行くことは覚えてるわね？」

「ああ、パートナー契約をしているから一緒に行けるって話だよな」

シンが現実世界に戻る時、シュニーやミルトとともにユズハもついてくることになっている。

「そう、でも今の契約状態だと同じ場所までたどり着けるかわからないの。ついていける確率は、たぶん半分くらいね」

半分という言葉聞き、シンだけでなくミルトたちも顔色が変わった。

「それはさすがに、聞き捨てならないかな」

一緒に行くのが確定しているミルトが、思わずといった風に呟く。

「そうだな。一応聞いておくが、一緒に来られなかった時はどうなるんだ？」

「世界の狭間^{はざま}に消えるでしょうね」

ユズハが沈んだ表情でそっぽを向いた。

「なるほど」

それだけ言っただけ、シンは椅子から立ち上がりユズハに近づいていく。怒られることはわかっていたのだらう。ユズハはその場に留まっただまふたりと耳を伏せている。

シンはユズハの前で膝をつき、まっすぐに目を見つめようとした。

「こっち向け」

シンは逸らされていた顔に手をやり、自分の方へ向けさせる。少しの間、シンはじっとユズハの目を見つめた。観念したのか、ユズハもその視線を受け止める。

「今は、何も影響はないのか？」

「うん、こっちにいる間は何も。ずっとこっちにいるなら、このままでもよかった」

「……そうか。今も負担がかかっているわけじゃないなら、とりあえずいいか」

今の言葉に嘘はないと判断して、シンは離れる。契約をした状態がユズハの負担になっているというのであれば、一旦解除するという選択も考えていた。

椅子に座り直して続きを促すと、ユズハはぼつぼつと説明を始めた。

「本来、私のような神獣とは一部の特殊な条件が揃わないと契約はできないし、できたとしても正規の契約になるわけじゃないの。シンと私が契約できたのは、例外中の例外。私の状態が極端に悪かったのと、シンが持つこの世界の限界を超えた能力があったから」

今の状態は、バグが発生している状態に近いとユズハは続ける。なまじ神獣との契約可能な例があるせいで、通常の従魔契約と混線し、実現している可能性があるようだ。

「普通なら、私の力が戻った時点でプレイヤー側がそれに耐え切れなくなる。でも、シンは力を取り戻した私との契約に耐えられるだけの力があつた。あとで確かめさせてもらうけど、たぶん、通常契約の上から私との契約を強制的に押し付けて、パートナーとしての力を行使してるんだと思う」

シンの圧倒的なステータスと、継承したオリジンの力。それらがバグを正常な契約に近い形で機能させているのではないかとユズハは予想しているらしい。

「それって、正常な状態に戻せるのか？ システム的には無理な行為だし、力づくでって意味なら、もうしてやるものなの？」

「うん。戻すのは簡単。一旦契約を解除すればいい。それで、無理やり上書きしていたのも消えるはず。ただそうすると、もう私とはパートナー契約ができない。私が力を取り戻しているから、もう上書きして契約する裏技は使えない。だから……契約を解除すると私は、シンについていけない」

最後の言葉を、ユズハは絞り出すように口にした。

「……だから、確率は半分でもそのままにしておきたかったのか。ん？」

ユズハの言葉に一応は納得したシン。すると背中に、強い視線を感じた。椅子の位置からして視線の主はシュニーだ。

意味もなくそんなことをするはずがない。シンはシュニーがこのタイミングで視線を向けてきた理由を考える。

（たぶん、契約を切れという意味ではないだろ。かと言って、確率50%をそのままにしておけてのもの、らしくない）

ならば、とシンは若干の疑問を持ちつつ口を開く。

「なあユズハ。もしかして、確実についてこられる方法があったりするか？」

「……うん」

返ってくる肯定。しかし、どうにも都合の良いことばかりではない雰囲気だ。

「昔の、シンが知ってるものとは違う、今だからできる契約がある。でも、違うからこそ、シンの

体にも影響がある」

「影響？」

「こっちにいる時は、今より少し強くなるだけで済む。でも、向こうに戻ってからどうなるかわからない」

「向こうに戻ってから？ あっちにある体がどうなるんだ？」

エレメントテイルということを考えると、ケモミミでも生えてくるんだろかと考えてしまう。いくらなんでも、モンスターになるなんてことはないよなと少し心配になった。

「予想だけど、こっちの能力が少し使えるとか、寿命が伸びるとか、そうなってしまふ可能性がある。もちろん、何も起こらない可能性もあるけど」

「あ、そっちな」

アニメや漫画の知識があったので、シンは中身のステータスが変わるのではなく、異種族の因子を取り込んで外見が変わる方をイメージしていた。

「そういえば、特殊な状況で契約できるパターンでも姿は変わらなかったっけ」

「人とモンスターじゃ、フォーマットが違いすぎるから。姿が変わることはないと思う。でも、人の姿でありながら人とは違うものになることで、あなたを不幸にしようかもしれない」

そういうことかとシンは納得した。

ユズハからすれば、自分のせいでシンが人の道を外れることは、己の存在が消えるとしても取り

たくない選択肢の一つだったのだ。

「他には？」

「え？」

「いや、他にはないのかつて。そんなに話しくいなら、もっとデメリットがあると思ったんだが」

「……ええと、悩むには十分な理由だと思うけど」

あまり気にした風でもないシンに、ユズハの方が困惑していた。

「別にモンスターになるわけでもないみたいだしな。こっちに残ってれば、種族特性からそれこそ下手な長命種よりも長生きしてたはずだし、今更といえど今更だ。それに、そもそもユズハを代償にしてまで身の安全を確保しようなんて思わない」

「でも、私を置いていけば、その代償もなくなるわ」

危険な存在など連れていく必要はない。言外にそう伝えてくるユズハだが、表情からは全く逆の考えが伝わってくる。

——離れたくない。一緒にいたい。

目は口ほどに物を言うとはこのこと。その目を見て置いていけるわけないだろうと、シンは小さく笑みを浮かべながら肩を竦めた。

「ふむ、ここからは我らは席を外した方が良さそうだな」

「そうね。シュニーが納得してるなら、あとはシンとユズハちゃんの問題だもの」

ユズハの方を見ていたシュバイドやセイイチたちが、ゆっくりと立ち上がる。これ以上ここで見聞きするのは無粋。^{ぶすい}シンは答えず聞くまでもないと表情が言っている。

「もしシンが伝えるべきと思うことがあれば、後で教えてくれ」

「わかった」

「では、我らは先に休むでしょう」

シュバイドがミルトやセイイチにも退席を促す。ミルトはシンに向けてウインクをしてから去っていく、セイイチは何か言いたげにしていたが、それを口にすることなく転移でパルダ島に戻っていた。

「ユズハを頼みます」

シュニーもそれだけ言っ部屋を出ていく。扉が閉められると、部屋にはシンとユズハだけが残された。

「シン……」

「大丈夫だ。置いていたりしない」

身を震わせるユズハはシンはそっと抱きしめる。安心させるために彼女の頭を撫でながら、静かな口調で続けた。

「こっちに來てからずっと一緒にいたんだ。これからも一緒にいてくれなきゃ困る」

「でも、私は……」

「いいんだ。いいんだよ」

おずおずと、ユズハもシンの背に手を回してくる。次第に強くなる力に、シンは何も言わずに撫で続けた。

五分ほどして、シンを離すまいと込められていた力が緩む。

「もういいのか？」

「うん。落ち着いた」

一歩離れたユズハは、憑き物が落ちたようにスッキリとした表情をしていた。

「ねえ、シン。ずっと一緒にいて、いいのね？」

「ああ、男に二言はない」

「……わかった。なら、もう遠慮はしない」

小さく呟くと、ユズハはシンの左手を取り、両手で包む。すると、手の甲が熱を帯びた。

痛むほどではないが、気のせいと呼ぶにははっきりした感覚。しかし、それも数秒で収まる。

「これが、ユズハの言ってた契約なのか？」

左手の甲に隼のマークが浮かび上がり、数秒して消えた。以前より少しリアル寄りの形状になったそれを見て、あっけなかったなと思いつながらシンは問う。

「いいえ、これは本契約前の準備段階。私とシンが、本当の意味で繋がるためには、相応の場所で

儀式をする必要がある」

「相応の場所、ユズハと出会ったところか？」

思い当たる場所はあの神社しかない。

「違うわ。あれは地脈に干渉するためのもの。本当の領域は、別の場所にある。精神の枷が消えつつあるおかげで思い出せた。管理を任せた人間がいたけど、過ぎた時間を考えると、その人は多分代替わりしてると思う」

「人に任せただのか？ 眷属のモンスターのの中には、位の高いやつが何匹かいたと思うけど」

ゲーム時代。エレメントテイルの領域内では、多くの眷属たちが人の姿とモンスターの姿を行ったり来たりしながら様々な場所で働いていた。

ボスのエレメントテイル以外に、中ボスのような存在も多くいたのだ。てっきり、そのどれかに託したのだろうとシンは思っていた。

「私がいなくなったら、モンスターたちではシンみたいなプレイヤーに対抗できない。だから、シンたちがNPCと呼ぶ人間たちに任せることで、ゲーム上に存在していた攻略ルートから逸らした。私が干渉しない限り、昔の方法では領域にたどり着くことはできなくなってるはず。私が最後に話したのは、王国の人間。王族と取引した覚えがある。記憶がまだ少しあやふやなところがあるけど、それは間違っていないと思う。私の領域で契約をすれば、私とシンに本物の繋がりができる。向こうに帰る時も、確実に一緒に行ける」

「そうか。なら、絶対に見つけないといけないな。それにしても、王族と取引か。場所は神社の近くだな？」
「そうなるよ。王族ってペイルリヒト王国の誰かになるのか」

「一応、王族にはリオンという伝手^てはある。それがだめなら、交渉にシュニーの名を借りることになるだろう。」

「明日、早速向かう。レトネーカを襲ったドラゴンの調査もあるけど、今はこっちが優先だ」

レトネーカの件は、現時点で手掛かりらしい手掛かりもないので、確実な方を優先する。それにユズハはシンにとって何物にも代えられない存在なのだ。

「あとは、何か伝えないといけないことはあるか？ 隠し事はなしだぞ」

「ない。私にとって、シンが契約をしてくれるかどうかが一番の問題だった」

少なくとも、シンにはユズハが嘘をついているようには思えない。それならいいと、シンはもう休もうとユズハに伝えた。

「一緒に寝る」

不安が解消されたからか、シンに甘えたいようだ。子狐モードで布団に潜り込んでくることは珍しくないで、シンは深く考えずにうなずいた。

あてがわれた部屋に入り、寝間着に着替える。装備変更の要領で着替えは一瞬だ。

部屋の明かりを消して、布団を被る。

すぐにユズハも来ると思ったのだが、なぜか聞こえる衣擦^{きぬず}れの音。パサリと布が床に落ちるよう

な音が續くと、シンもユズハが何をしているのか気づいた。

「ユズハ？」

人型から子狐モードになるのに、服を脱ぐ必要はない。何をしているのか問おうとユズハの名を呼ぶが、返事はない。気配で足元に移動したのはわかった。ほとんど間を空けずに毛布の中に潜り込んでくる。

（まさか、裸で一緒に寝るつもりなのか）

もしくはそう思わせようとかからかっているのか。もし人型のままなら一旦起きてから服を着せようと身構えていると、布団からいつもより大きな獣モードのユズハの頭が姿を出した。

なぜ服を脱いだのかはわからないが、獣モードならこれといった問題はない。今日くらいは好きにさせることにした。

大きさを増したことでベッドが軽く軋^しむ。シンがふわふわの毛並みを堪能していると、ユズハは頭をシンの胸の上に置いて目を瞑^つった。ユズハの体温と毛の温かさにシンにも眠気がやってくる。軽くユズハの頭を撫でてから、シンは眠気に身を任せた。

+

翌日に朝食を取ってから、再びシンたちは各部門長との話し合いの席につく。

「さて、一晩時間をもらったおかげで僕らも頭が冷えた。昨日のような脱線はないはずだ。それで、シン殿たちはすぐに発つのか？」

ユズハとの契約を正式なものにするため、シンたちはベイルリヒト王国へ向かうことを決めていた。かつての伝手、もしくはシュニー経由で王族と接触し、すぐに対応されるかわからないので、空いた時間でユズハとシンが初めて出会った神社に向かい、改めて調査を行う予定だ。

さすがに神獣との契約について島の人々に話をするわけにはいけないので、ユズハが眷属として成長するための試練とともに受けなければならなかったということにしてある。

ヌヴァとの戦いで大きな成果を見せたモンスターの眷属——それがドルクたちのユズハへの認識だ。ユズハがただの眷属の子狐ではなく、上位の存在への成長を望んでいると伝えれば、シンたちがバルダ島から急ぎ移動する理由としては十分だった。

「はい。もう少し意見交換がしたかったんですが、時間を空けるわけにもいかなくてですね」

「いや、いい。わかつとる。僕らの知るパートナーモンスターとはものが違うからな。優先順位を間違えちゃいかん。それにもともと、滞在期間を決めていたわけでもない。引き留めたりはせんよ」

そもそも反対意見などあるはずがなかった。

シンに力を貸し、ヌヴァとの戦いでは味方として圧倒的な存在感を示していた存在。ヌヴァを光の中に消し去った規格外のモンスター。その眷属の成長を促す行為に待ったをかける気持ちは、部

門長たちの誰も持ち合わせていなかった。

「ありがとうございます。あ、レトネーカを襲ったドラゴンについては、こちらでも調べてみます。もし何かわかれば、連絡しますね」

「協力感謝する。シン殿やお仲間なら心配はいらんと思うが、あれほどの力を持った存在に課される試練だ。備えは怠らんようにな」

握手を交わし、島から大陸へ移動する準備に入る。向かうのは、鳥型モンスターのメガバードがいる発着場だ。バルダ島に来る際に使った空輸ルート^{おこた}を、ドルクたちの厚意で使わせてもらえる手筈になっていた。

実は転移ですぐ移動はできるのだが、それを公開するわけにはいかなかったので一番近い陸地まで送ってもらう。

途中でレトネーカのところ^{おこた}に寄ってもらい、事情を説明する。内容が内容だけに、むしろ自分のことよりもそっちを優先するのは当然と恐縮するレトネーカだった。

「さて、一応障害物のないところに行ってから転移するか」

バルダ島に戻るメガバードを見送り、移動を始める。メガバードも珍しいので目立たない場所に降りてもらったが、どこに人の目があるかはわからない。念のため、木々の茂っているエリアに入ってから転移をした。

転移先は月の祠があった場所だ。前回転移した時は監視がいたので、今回も【^{ハイド}隠蔽】スキルを

立ち読みサンプル
はここまで

Chapter 2

神 獣 の 領 域

THE NEW
GATE

使用して姿を見られないようにしてある。

「ところで、ユズハちゃんの領域を任せた相手って王族って話でしょ？　どうやって調べるの？」
ティエラがシンに尋ねる。

「リオン王女とは知り合いなんだ。前にギルド経由で連絡が来たから、こつちからも連絡できないか試してみるつもりだ。まあ、連絡が取れてもどこまで情報が得られるかわからないんだけどな。神獣の領域について本当に管理を受け継いでいるなら、いくらAランクの冒険者相手だろうと話せる内容じゃないだろうし。もしだめだったら、悪いがまたシュニーの力を借りることになると思う」

ユズハという神獣の存在を伝える必要がある。それによってすんなり話が進めばいいが、シンもそんなに簡単な話にはならないだろうということはわかっている。

「構いません。こういう時のために名前を広め、援助をしてきたのですから」

「本当に助かるよ」

今回のことが片付いたらシュニーにもちゃんとした礼をしないと毎回つつ、シンは月の祠（つきでら）の跡地からベイルリヒト王国へ歩を進めた。